



二因七高僧偈圖會

震旦之卷

二



五曜文庫

三國七高僧傳圖會震旦之卷目錄

曇鸞大師傳

第一 南北兩朝歷代

第二 曇鸞達梁朝謁武帝

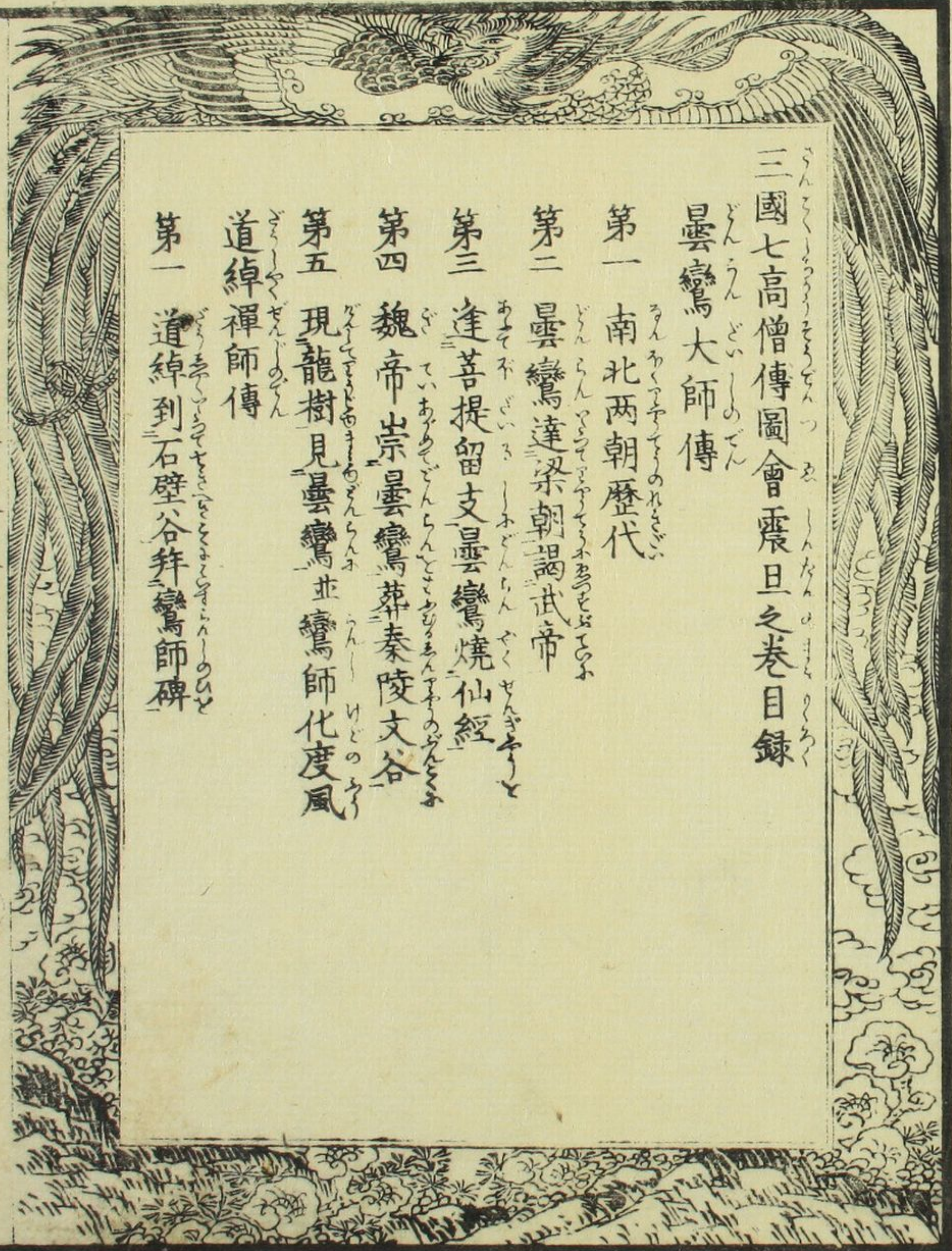
第三 逢菩提留支曇鸞燒仙經

第四 魏帝崇曇鸞葬秦陵文谷

第五 現龍樹見曇鸞並鸞師化度風

道綽禪師傳

第一 道綽到石壁谷并鸞師碑

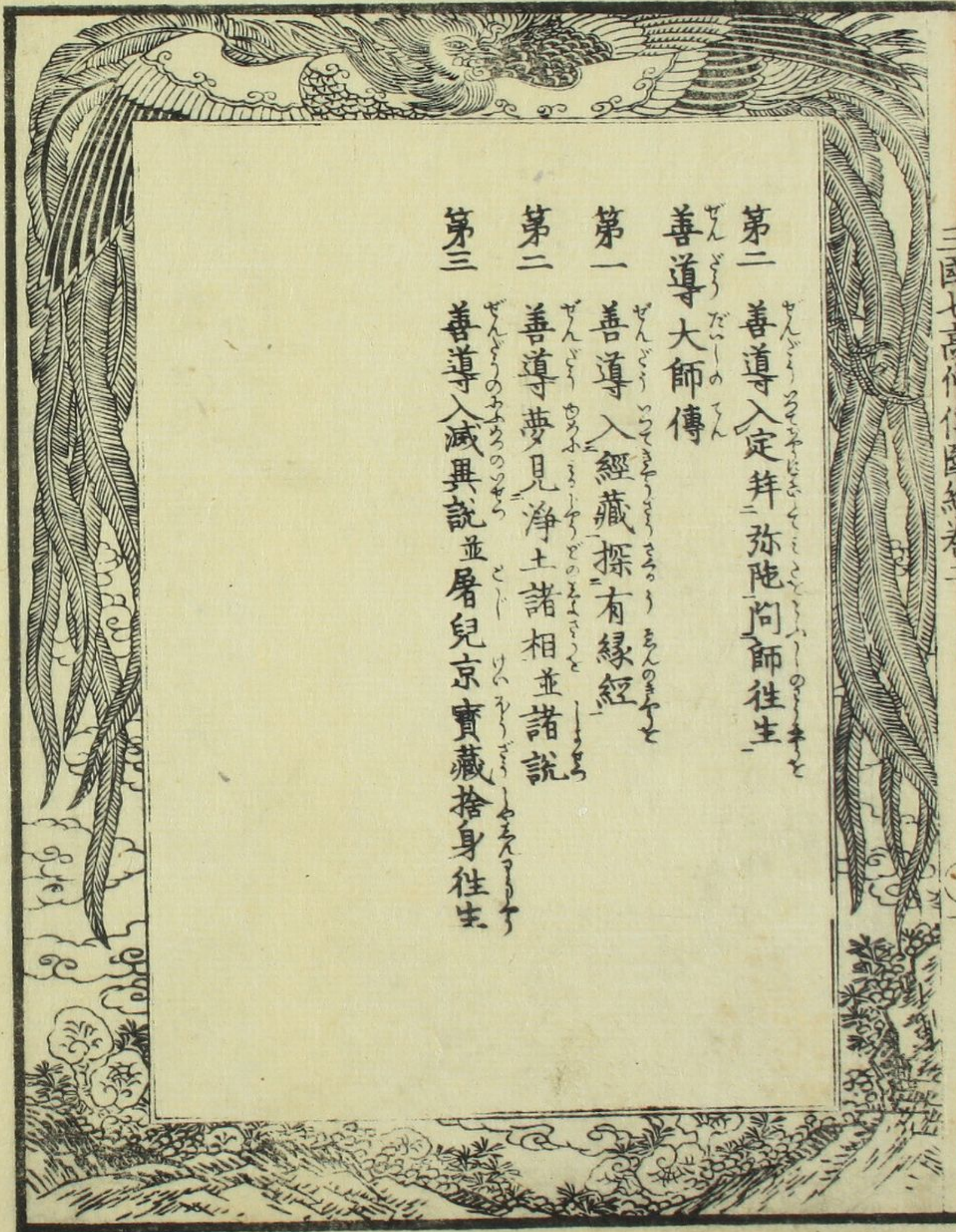


三國七高僧傳圖會震旦之卷目錄



南朝梁武帝

- 第二 善導入定并 弥陀問師往生
善導大師傳
- 第一 善導入經藏探有緣經
- 第二 善導夢見淨土諸相並諸說
- 第三 善導入滅異說並屠兒京實藏捨身往生





江南隱居
墨壘大師



菩提流支三藏

三國七賢傳卷之二



善導大師



道綽禪師

三國七高僧傳圖卷三



長安居士
京寓藏

三國七高僧傳圖會震且之卷

杓杞 卷一 禪居士 編輯

○曇鸞大師傳

續高僧傳第七 義解 曰魏西河石壁谷。玄忠寺釋曇鸞。武為密未詳其氏。雁門人家。近五臺山。神迹靈怪。逸于民聽。時味志學。便往尋焉。備觀遺蹤。心神歡悅。便即出家。內外經籍。具陶文理。而於四論佛性。所窮研。乃至

曇鸞大師。北魏の代の人にして。始ハ四論宗なり。後ハ菩提流支三藏の教ありて。四論の講説と聞キ。聖道万行と捨テ。本願他力ヲ皈シ。一向専念の宗風と弘メ。北魏とハ南北朝の魏の代ナリ。南北朝とハ晋宋齊梁陳隋の六代と南朝トモ云。此トハ同時ハ北朝ハ六代あり。後魏東魏西魏後梁北周後周等ナリ。此時天下ニ分れて。揚子江より南と南朝。北と

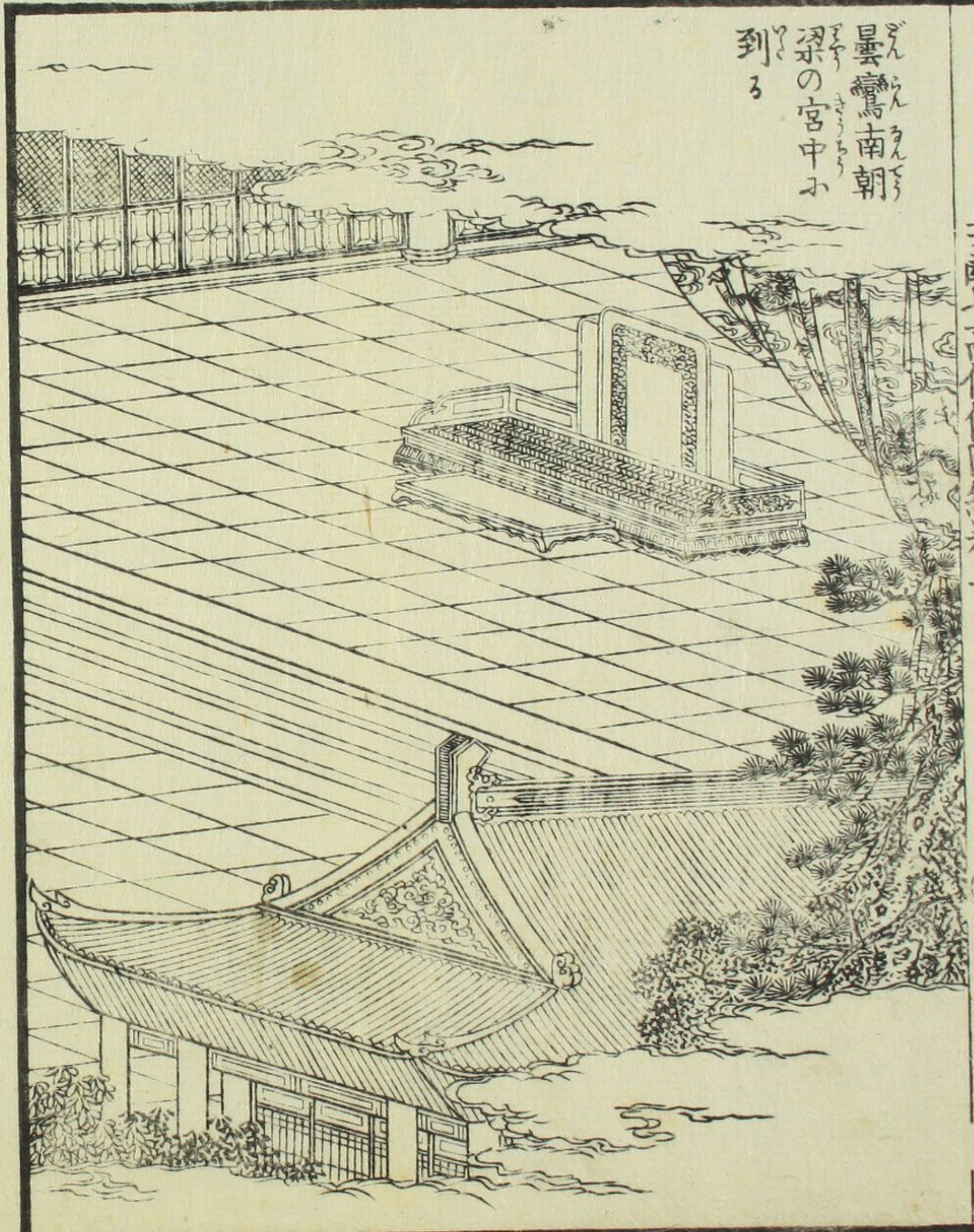
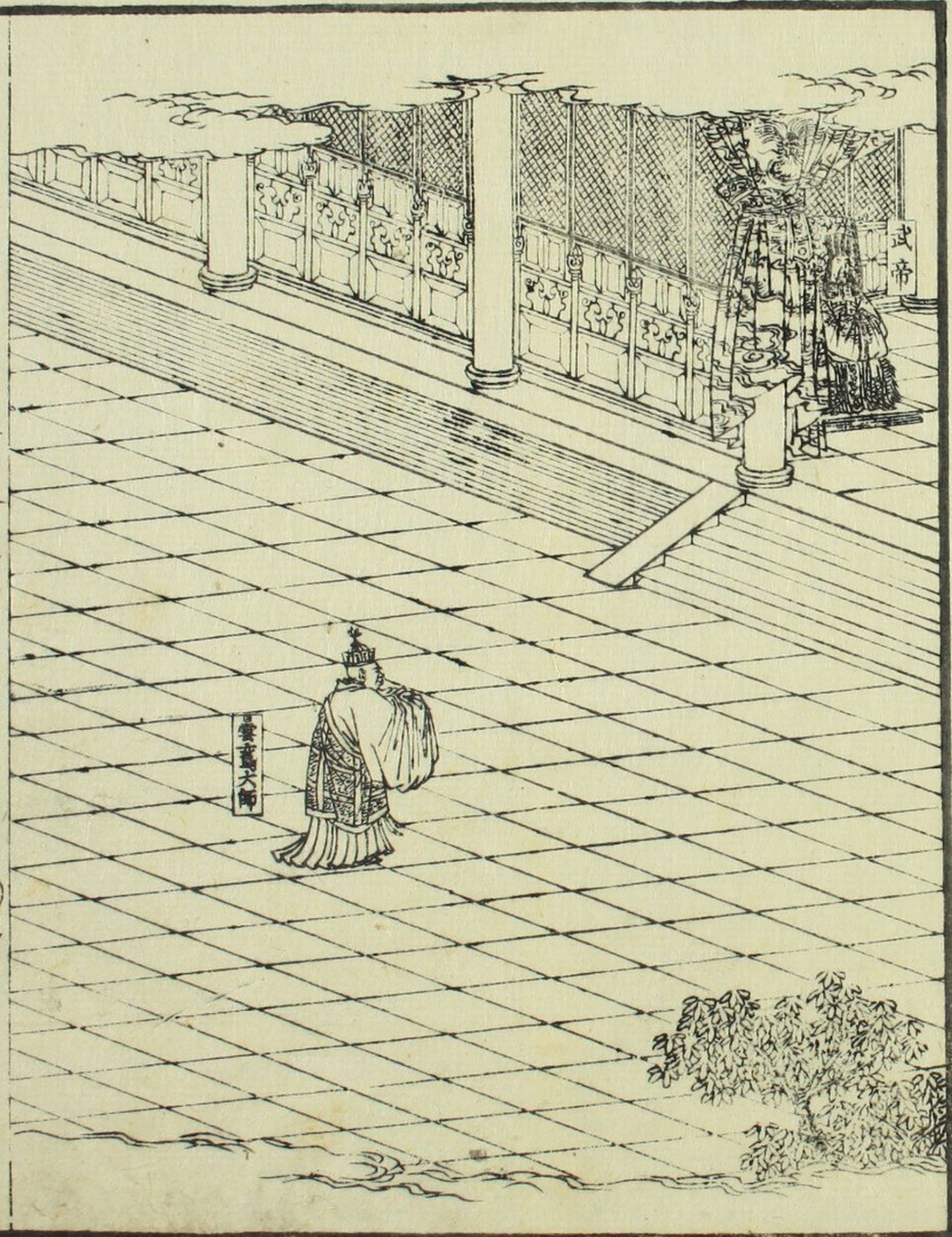
北朝として各都と建て天子と号し。互に天下と諍して戦ひやむじ。曇鸞（曇鸞）は北朝後魏の人にして第六の主孝文帝の兼明元年丙辰（兼明元年丙辰）に生じて東魏の孝靜帝（孝靜帝）代りに東魏西魏の興和四年壬戌（興和四年壬戌）に滅し。夫より八年過て北齊にたり。又高齊にも曇鸞の在世南朝として宋齊梁の三代を經る。尚吳説あり。略して又四論宗とす。三論宗のそと。中論百論十二門論の三論と依る所とする也。又三論宗といひ。又智度論を加へて四論宗といふ也。則中論八卷ハ龍樹菩薩の作る處の論也。一曰論二卷ハ提婆菩薩の作る處の論也。此提婆ハ付法藏二十四祖の時ハ才十五祖にして迦那提婆大士と稱し。姓ハ毘舍羅。南天竺國の人なり。龍樹菩薩小謁して付法あり也。十二門論一卷ハ龍樹菩薩の編る論なり。大智度論百卷ハ亦龍樹菩薩の作る處の論也。曇鸞此四論よりして佛性常住の義と信ず。らに常小四論と講し給ひしなり。

三

鴈門とて處の人なり。其家五臺山に迫り邊をみあり。志學（志學）十五。五臺山に登りて文珠の淨土を冥場と尋ね。其遺跡と拜して菩提心と起し。即出家し修學し。内典外典の經籍とある道書。儒書天文地理と始め。廣く佛教に通達し。別して四論の佛性本心と研さる。一時大集經と讀む。其詞義深密にして容易閑悟が事と恨まら。此經と詳に注釋し。加へて書とほりて。衆と導んと思ひ。其文言と著し。事半と過る。ころ。不慮氣疾と発し。止と得て。推小筆と停め。周く醫療と加へ。尚も保養のたらし。汾州山西秦陵の故墟に至り。城の東門に入り。上青霄と望み。忽ち天門の洞を開くと見ゆ。六欲天（六欲天）の次第階立。上下重複。歴然として齊く見ゆ。これハ依病頓小平愈し。即ち前書け。注釋を作し。徒んと欲して熟思すとたまふ。夫釋尊四十九年三百六十餘會の説法甚以て廣多し。其上菩薩の論人師の釋誡學とて經論釋多し。又此身のくるら

三國七高僧傳圖繪卷三

六



景雲南朝
梁の宮中へ
到る

三國七高僧傳國鑑卷三

幸と思ふ。呼ハ吸と待びて死する世の風なり。普く經論と學び盡し解教成就か
 らんと短命を及ひばし。本草の諸經具正治の法と明と長年の神仙世間往々
 あり。所詮仙術と習く長命不死の法を得ば。佛教と崇めて志氣の注解と満
 足せば是入善なり。思ひ立たす。江南より地小陶隱居と号る仙人ありて方
 術其妙と得て海内普く崇敬と。故小曇鸞とんは授けて仙術と學ぶんと北魏
 の地と出く南朝の都に至る時帝小拜謁し奉りて死由と達する。此時南朝ハ
 梁の武帝の大通年中なり。所司等北國の虜僧曇鸞と聞く。ソレ子細ありん哉と
 疑いて種々查照とす。更ふ吳る夏あるは頓て姜聞と遂りり。是所謂
 戰國とて若や他邦との同者や。疑ふは然る小帝きりり
 是ハ必國と現る。小曇鸞殿小入と宣うと頓て引路とす。りり
 此重雲殿とて其稱許多なり。門の數又廿餘あり。千送道と甚紛らり。ま
 方り誘ひり。帝ハ先殿中の隅に於く繩牀小卻坐し袈裟と覆ひ納帽を

被る。曇鸞宮殿の前小至りて後と顧みたまふ兼對者さ小見へ。傍と見た
 ず。高坐と稱て上りれと飾りたるあり。外に坐す。曇鸞進んでこれ小昇りて
 佛性の義とす。三度帝命して宣く。大檀越佛性の義深略ありて疑あると
 とて帝とて帽子とて便をく向たり。曇鸞答く。答たり。問合ふ
 稍時つる。程小帝の。今日既小暮不及。明日猶相見也。と
 曇鸞即ち坐と下り。禮とす。徐と出り。時小廿余の門一也。も
 詔り出たり。帝とんと歡覽ありて。大に嘆訝とて宣く。も此千送道ハ年
 久く殿中侍り。常小往還小迷り。彼法師始と來りて。更
 迷事と。正しく凡人小有へ。頻々小感心とす。明日小
 大極殿小迎へ入る。帝禮接と厚く。由て來ると問く。曇鸞答
 ての。野僧佛法と學ぶんと欲と。小年齢の短きと悲しむ故。遠々と世國小
 來り。陶隱居小後。仙術と求んと致り。帝の。此仙世と友と

せむら隱遁者ありて。近頃教同くも奉らむ。心小住せて方々住して尊師先
書簡と以て機嫌と尋ね而て至るなり。曇鸞も命を隨ひ書と
以て尋ねり。陶隱乃ち答曰去月耳聞音聲茲辰眼受文字將由頂
禮歲積故使應真未儀。正爾とまゝ。程小曇鸞のこらひら彼山所至
給く小陶隱居へこんと請入く大に欣然便仙經十卷と以て遠く奉るの
意不酬ふ。曇密これと授け。夫より還路小浙江に下り。此小龍即子神とて者有
彼浙江波浪と涌ると七日。曇鸞その大濤の初小値りて渡るとと得故
曇鸞彼神廟小往く。信として祈告なまじり若祈ぬのこらむ。せむら
廟と再宮して礼謝まじり。須臾江神忽形を現と。其容貌二十計
けり。曇鸞小迎づら告く。貴僧と渡ると故に明朝と待たむ。必
穩く下。是小因曇鸞の聖朝至りて見たり。濤猶烈とて。怙然
として安静たり。頃く船小乗じて容易とて南朝の都小還り武帝小達じ

三

て具小由縁と奏給武帝。感きし。勅て江神の爲更ふ靈廟と建営せし
斯く曇鸞の帝小暇とて。南朝とて。本國小飯。北魏の境小至り。陶隱居
が教のぞり。名山小入り修行し。仙術と得んと欲とて。洛外と巡り。此彼を
勝地とて。名山小折。不圖道とて。北天竺の乾陀會國より。三藏菩提留文小
値り。曇鸞携りなま仙經十卷と出。目より高く指挙て。此是長生不死
の仙經なり。佛法の中小於て長生不死の法ありて。此土の仙術小勝るもの有や
と尋ね。此時留文三藏心小思ひ。や。長生不死の仙術と習ひ修して。八苦
充滿の世界小久く存り。色相輪廻の苦と受とてあり。更小出離生死。頓證
菩提の仙經あり。然る小曇鸞の色相相續の仙經と。至極のすは尊り。ハ
儲と淺ま。凡人哉。あ。穢人を見とて。あ。極詞と聞とて。大地小座
とて。懷り。觀無量壽經と出とて。是。此西天の大仙演説の長生不
死の法なり。之小依て修行せん。命小限ら。無量壽佛とて。繼仙術

學び長生の法を得たりとも少時の間死をばて終ふに死して三有に轉廻するもの
 吁愚多し。此の心を翻し我教を以て當ふ生死を解脱する事を得るべし
 と念佛の功德と云々語りて。曇鸞實も。領解し。念佛往生の深
 意を授けり。直に陶隱居より授けり。仙經十卷を焼きて。それより四論の
 講説は永く止念佛三昧の身となつたなり。讚阿彌陀佛の偈と造りて。安養
 淨土の依正二報の功德を顯す。天親菩薩の往生論を注解するなり。實に此
 仙經の多くの辛苦とあり。末のい。所するは。時世に。敵國への往來自由な
 らず。種々小心を令し。違々江南に赴。懇望し得る。仙方と。流支の一言の示教
 を依り。忽ち先非と悔きて。燒きて。多年習学し。の。聖道万行と。う。捨他力
 の大道を皈し。一向專修の真門に入らる。宿善至來といふ。此即曇鸞
 の改悔回心一念發起の時節平生往生の現れと言べし
 菩提流支三藏。北天竺乾陀會國の人なり。元魏の南臺洛下永寧寺に住し

四

著し所の經二十九部。百二十七卷。淨土傳來相承の宗祖たりとあり。

天親菩薩の後。此三藏を皈し。二藏義を見えり。

按じり。流支三藏曇鸞大師の授けり所の淨教は。南山唐高僧傳の説あり。

觀無量壽經と云。又雲。接阿彌陀經の説あり。阿彌陀經と云。道世の日溪

江州日野正大無量壽經と云。蓮如上人の正信偈大意は。南山の説あり。

世宗寺法霖量壽經と云。然るは三論の系譜は。流支天親の淨土論と授けり。淨土

論は流支の將來より自これと譯。而して此論と曇鸞師の授けり。故に曇鸞

此論を注解と著し。後人尚考べし。

魏の帝王曇鸞大師と崇めて。神鸞と号けり。勅と下し。并初の大巖寺に住

せり。尔後汾州北山石壁の玄忠寺に移住せり。又介山の陰に住し。徒を

聚めて淨業を蒸じ。今鸞公巖と云。是より魏の興和四年卒し。春秋

六十有七。臨終の日。至りて。虚空より花降る。幡天蓋。亦寺の宇を覆ひ。香氣

四面薰^ん。音樂の聲を^こ。寺に登る^の。許多の衆人^も。これを見聞^を。車^の由^り。帝^に奏^す。聞^か。勅^{して}。汾西秦陵^の。文谷^に葬^す。靈廟^を。營建^し。並^に石碑^を。と建^て。師^の高德^を。録^し。給^ふ。今^も。尚^も存在^す。云々。已^に續高僧傳^の大意^に。淨土論^下云。沙門曇鸞法師^ハ。并州汶水^{の人}なり。魏^の末高齊^の初^に猶^も在^り。神智^高遠^三國^の人^皆その徳^を。知^る。衆^の經卷^を。詳^しく。人^外。獨^に歩^を。梁國^の天子^蕭王^恒。北^に向^て。曇鸞^{菩薩}。禮^し。なす。天親^{菩薩}。の淨土論^を。注^し。解^し。裁^し。西卷^を。又^も。無量壽經^を。奉讚^す。七言^の偈^百九^{十五}行^并。問答^一卷^と撰^集。世^に流行^す。道俗^と進^り。決定^往生^諸佛^と見^奉。奉^る。得^え。や。常^に龍樹^{菩薩}。臨終^の。開悟^と請^う。誠^に所願^の如^く。一夜^聖僧^の像^と現^れ。て。忽^ち。未^だ。東^に。栗^の倉^{の中}。未^だ。追^は。白駒^際と過^ぐ。暫^も留^ま。已^に去^る。未^だ。追^は。現^れ。

在今何^ん。白駒^迴。事^難。法師^妙。言^旨。達^を。是^終。と告^る。かりと知^る。これ依^り。即^ち。夜^中。諸^方。白^衣。の弟子^及。寺^内。出家^の弟子^小告^く。今^既。命^終。と。三^百余^人。一^時。雲^の。集^る。曇鸞^{沐浴}。して新^に。淨^衣。と着^し。手^に。香^爐。と。西^に。向^て。坐^す。門^徒。教^誡。西方^の業^と。索^じ。日^の初^出。時^大衆^聲。と齊^し。彌^陀佛^と念^を。使^即。壽^終。寺^の西^五里^{の外}。比^丘尼^寺。あり。並^に。是^門徒^{あり}。早^朝。小^堂。不^集。粥^と食^を。時^空中^に。微^妙。の音^樂。聞^へ。西^に。來^り。東^に。去^る。見^る。其^所。集^る。衆^人。皆^{これ}。と奇^異。中^に。智^者。あり。大^衆。告^て。云^々。法師^如。上^一生^人。教^へ。淨^土。の業^と。修^め。今^此。音^樂。東^に。向^て。去^る。は。必^ず。是^法師^と迎^ひ。來^り。食^訖。頭^に。法師^の所^に。訪^う。ん。既^に。寺^と出^ん。時^又。音^樂。空^中。東^に。向^て。去^る。西^に。向^て。去^る。閼^尼僧^等。相^與。不^至。師^と訪^ふ。果^{して}。入^滅。見^る。

曇鸞大師
入滅諸佛
來迎の圖



三國七高僧傳圖卷之三

五

淨土往生傳上云。上卷一夕。鸞正持誦。見一梵僧。被昂而來。入其室。曰。吾龍樹也。其所居者淨土焉。以汝有淨土之心。故來見汝。鸞曰。何以教我。樹曰。已去不可及。未來未可追。現在今何在。白駒難與迴。言訖而失。鸞以所見勝異。必知死生之期。戒美。即集弟子數百人。盛陳教誡。言其四生。役々其止。無日地獄諸苦。不可以不懼。九品淨業。不可以不修。因令弟子齊聲高唱。阿彌陀佛。鸞乃向西。冥目頓顙。而示滅。是時。道俗同聞。管絃絲竹之聲。由西而來。由西而隱。魏主曰。此誠佛子之真修。其所說也。有在矣。勅葬淨西之文谷。仍條其生平所習。以立碑焉。瑞應刪傳。新修往生傳上。龍舒淨土文。五樂邦文類三。佛祖統紀。三八。蓮宗憲鑑。四歸元。直指集上。諸上善人。詠往生集。一等。不出。皆大同。

安樂集の下。曰。曇鸞法師。康存の日。常於淨土。修亦每。世俗の羣。わ。未。て法師。不可。く。向。て。曰。十方佛國。皆淨土。と。法師。獨。意。と。西。に。注。ひ。豈。

偏見。生。ず。非。ど。も。法師。對。て。云。吾。ハ。既。不。凡。夫。智。惠。淺。短。と。未。地。位。不。入。と。念。力。均。く。と。べ。ん。哉。草。と。置。て。牛。と。引。恒。不。心。と。槽。檻。不。繫。と。如。し。縱。放。全。く。所。取。る。と。得。ん。や。復。難。者。紛。紜。と。も。法師。獨。決。は。是。を。以。て。一。切。道。俗。と。問。と。く。但。法師。と。一。面。相。遇。者。り。未。正。信。と。生。ぜ。う。も。六。勸。り。て。信。を。生。ぜ。ら。若。已。不。正。信。を。生。ぜ。う。者。ハ。皆。と。り。て。淨。國。不。取。也。是。故。不。法。師。命。終。の。時。不。臨。ん。で。寺。の。傍。左。右。の。道。俗。も。旛。華。院。不。映。じ。り。を。見。ら。と。く。異。香。音。樂。迎。接。して。往。生。と。遂。る。と。聞。と。云。曇。鸞。大。師。一。代。の。化。度。の。夙。先。第。一。天。親。菩。薩。の。往。生。淨。土。論。ハ。文。句。甚。ど。簡。畧。不。く。愚。昧。の。と。れ。不。取。惑。ふ。所。多。き。故。其。論。ハ。注。釋。を。加。へ。往。生。論。注。と。し。る。上。下。二。卷。の。書。と。作。り。し。自。力。他。力。の。深。義。廣。大。無。尋。の。心。の。所。由。と。わ。ん。を。示。し。し。此。論。注。の。注。の。字。ハ。濯。と。し。る。文。字。ハ。水。と。し。る。掛。れ。物。と。し。る。と。顯。々。如。く。淨。土。論。の。中。に。教。化。した。ま。ふ。天。親。論。主。の。思。召。の。賜。と。探。り。出。て。示。

給て予意なり。又解とて前ふるも此解の字は支字ありて
 りるも糸とやなれて見せり意なり文字の作るも角扁ふ牛は後い刀は從
 文字ありて唐書において牛の料理は其時に下手なるは思ふも其
 のも時と移して手際あり。尤是は其料理の仕方ありて
 骨のつみ切れと覺しは早く骨と肉と能分して其手際よく
 唐書に庖丁とて此料理の妙と得たる者あり。故に牛と解刀と庖丁と
 たり。莊子曰庖丁文惠君の爲ふ牛と解て曰臣刀十九年解とて數千牛
 して刀の又新ふ研て如く。されば數多の牛と料理て刀の又の損
 ともなると。其牛と解て轉て未して何復あり物のもつと
 手際よく筋道のまると此解の字は用也。又淮南子も屠牛一朝の解は
 吐く九牛而刀りて毛は判と。料理の上手と。夫れして憂と解或は
 思と解とて遺と。さりとて糸の如くると解と判也講

也説也釋也。字注り。今も淨土論の自力他力の道理。往相還相の二
 司向の謂一心皈命の安心。明小変判し講釋。曇鸞大師の注釋の解
 あり。天親菩薩の論判の愚るるものよ。義理分明なり也。
 再説曇鸞大師の釋尊入滅の後一千四百二十五年。後魏の孝文帝の義明
 元年丙辰。誕生し。東魏の孝靜帝興和四年壬戌。春秋六十七歳
 ありて入滅。即日本皇三十代欽明天皇の三年あり。
 曇鸞大師往生論の註をつつて論の不如實修行相應を釋して。三信三不信
 相對の釈を設けり。此釈は原論の一心皈命の一心を釈して起す。三信
 は他力の一心の細釋して他力の信心なり。三不信は自力の信心の相釋して
 論ふ。稱名憶念を無明由在と所願と滿せざる者あり。如實修
 行相應も。自由なるを云ふ。不如實修行は自力雜善の修行を。如
 實修行は他力信心の行なり也。故に注ふ不如實修行と釋して三種の不相應なり。

三國七高僧傳卷之三

一、信心淳く若存若亡を故。二、信心一に決定するを故。三、信心相續せん。餘念間が故。よき第一の不信は信心の弱し。信心堅固なれば、或は煩惱重く罪障の強き身を卑下し、又信の甲斐なく行の怠りあけく、本願を危し。若善心も起り妄念も起ると、念佛のいふ時に往生せよと思ふ斯のどく、或は往生せよと思ひ或は往生せよと思ふ故。あまるともれ無き思ふ有。故、若存若亡と第二の不信は自力雜善の執情をがく。他力往生の正念落つべ故。慥に往生決定と思ひ定り心なかり。第三の不信は或は雜善をまへ或は助業を勵む。或善本起行の念やまへ斯のどく、余念雜りて不信心相續せん。此三不信は自力の信を、ちんちんちんちん自力根性と振とく。一向一心に稱名念佛して、佛恩を喜ぶを三信とも他力の信とも一心皈命ともいふ故。注し三不信を釈し已く此と相違とく。如實修行相應と名く。是故論主建小我一心と言ふと言へ。是れ論主の一心と言ふは他力の信心也と云

○道綽禪師傳

道綽禪師の傳、續高僧傳第二十四篇。瑞應剛傳、新修往生傳中、佛祖統紀三ハ、諸上善人詠往生集一等不出たり。大同小異あり。茲ハ續高僧傳の大意を以て著とる。抑禪師ハ釋尊滅後一千五百十一年に唐の并州の普陽汶水懸小生れたり。則後周朝北の武皇帝の保定二年壬午と云。按ずる小此年後周滅して、後梁の明帝天保元年より南朝の陳の文帝天嘉三年に當る。蓋後周の代小生とて、化と唐朝小盛とを故。唐の道綽禪師と云る。道綽姓ハ衛氏弱齡とく俗間小在り。閭里小あつてと恭讓を以てと云て。人と敬いて侮らぬ少長も小其礼節と専らと寸人小是と稱美せり。十四歳して出家し。廣く諸教あつたり。殊小大涅槃部と宗して弘傳し給ひ。講むると二十四遍。涅槃宗ハ日本小傳未だ其大極とて天台宗小此とて彼宗小

五時八歳と云る子。法華涅槃同醍醐味とて一時と云ると云る

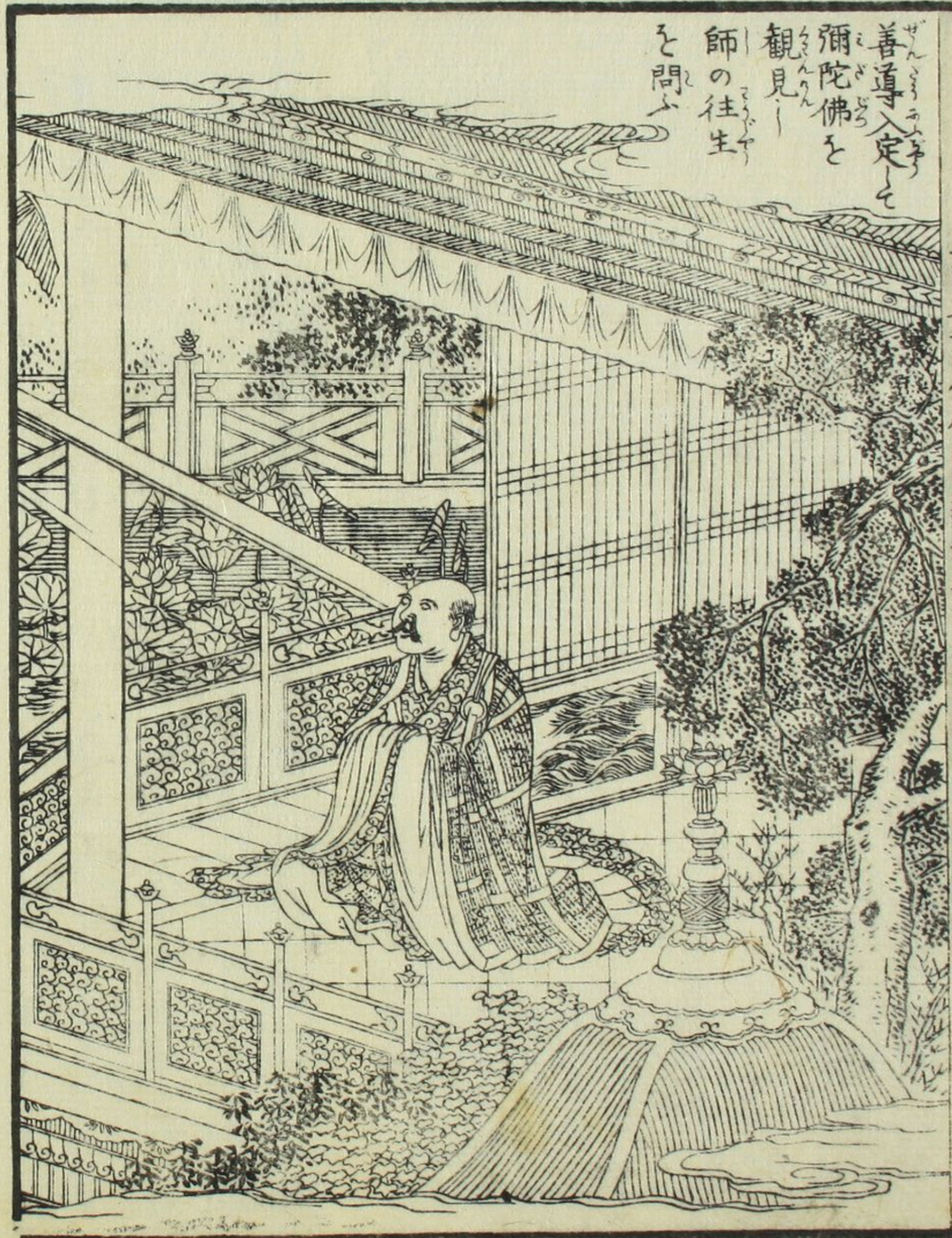
晩の小ん瓚ぜん禪ぜん師しふつつて空くう理りを修行ぎやうしり。瓚ぜん禪ぜん師し大おほ嘆たん羨せんしてこれを愛あいす
 四方しやうには德とく不ふ沾せん。それを名な遠えん近きん小こ高こう。衆しゆ人じんをあらんくを尊そん敬きやうせり。一時いつ汝に水すい石せき壁へき谷こ
 玄げん忠ちゆう寺じ小せう登とうする。此の佛ぶつ利り曇とん曇とん大師だいの建立たてして。則すなはちに又また谷こ小せう鸞らん師しの碑ひり
 道だう綽ちやくふし詣ぎりて碑いの銘をよみて大おほ小せう慚ぜん謝しゃして。曇とん曇とんと吾とをこれを
 智ちとうたれば月と星との如ごとく。其の德とく行ぎやうとうたれば珠と瓦との如ごとく。其の曇とん曇とん師しとう
 尚なほ四し論ろんの講説せつと閣て。本ほん願げん他た力りきとたのも仙せん經ぎやうを焼きて。ふくくく淨じやう土ど小せう歸きしてふく
 況きやうや我淺せん智ちとやと。ともともらら碑い前ぜん小せう望ぼうする。回かい心しんして淨じやう業ぎやう小せう飯はんして。あらたた
 終しゆうくの滅めつ後ごの弟子ていと思ひし。哀あは愍みん覆ふく護ごして。在あらまりし如ごとく心願しんがんして大
 ようしては是まで修學しゆがくしめしり。涅槃ねはん宗しゆうと速小そく捨しやて戀師れんしの往生じやうじやう論ろん注しゆと指
 南なんとし。此の玄げん忠ちゆう寺じ小せう在ざい住じゆうしり。自じ行ぎやう化け他たしり。嘗かつて行道ぎやうだうしり。あらたた僧そうありて
 道だう綽ちやく佛ぶつと念じり。一いっ珠しゆ數すう。七しち寶ぼうの山のぶとを見みり又西さい方ぽう小せう靈れい相しやうと見
 ると數すう同どうなり。此のうつて盛德せい日じつ々々小せう增しやうす。采譽よ遠えんくわりんて。道だう俗じやく子し女にょ赴しゆく

者もの山やま小せう充ちゆう聖せい。恒こ小せう觀くわん經ぎやうと講むること二百ひやく遍べん。人ひとの手みの珠しゆ數すうと指。口くち
 佛ぶつ号ごうと唱ふ。毎時まい退たい散さんの印に林谷りんこ小せう弥み多たり。或ハ邪見じやみを信しんぜば。是を毀くわい
 謗ぼうしり。これも一いっ道だう綽ちやくの相負しやうの柔和じやうとを見みて。氣きとのまれ飯はん伏ふくと曾て貞
 觀くわん二に年ねん四し月げつ八はちとうつて將まさ小せう命めいの盡んとを知り。普くそののうと衆小しゆう生じやうくく
 これと聞きはりて來り。此山さん寺じにし。此の人ひと々々皆みな曇とん曇とん大師だい七しち寶ぼうの船小せん乘じやう未みり。
 道だう綽ちやく告こて云。汝に淨じやう業ぎやうとぞ不ふ成じやうとて往じやう生じやうとう。堂だう成じやう就じゆうと。然もも餘あま命めい未み
 盡じんむの乃のまと見みり。并か小せう化け佛ぶつ空くう中ちゆうにまりて。天てん華けと散とを見みり。群ぐん參さんの道俗じやく
 其の天てん華けと袖たり。ふくくふ薰ぬる香かう氣きとぞくい。又また往じやう生じやう證じやう據きょのくら小乾かんり。地
 地ち小せう蓮れん華けと挿く試みし。某のままと七日にちあらんて橋きやう鮮せんなり。其の餘あまの善相ぜんしやう
 記きとく小せう遑たうのび年ねん七しち十じゆうふ及んで齒わらた生ずる。本ほんのまり。余のまり。氣力きりき徒た
 しく容色じやうしき盛せいなり。淨じやう土どの法門ぽうもんと談述だんじゆつしり。ままり。理味りみ奔ほん流りゆうしり。辨べん舌じやう懸けん河かの如し。
 又また人ひと小せう孫そん施しの佛名ぶつなと念じり。事ことと勸す。或ハ麻の實大だい豆とう小せう豆とうと用ひて數すうと

取らば一唱一和毎小使一粒を置き斯の如くして數百萬斛と積人あり是も
 事にして慮と攝縁と静んとして為り。道俗多し風を慕ひて修む者
 多し又道綽自ら常に木樂子と珠數として諸の四衆小遺す其称名念佛と
 教(ち)もく禎瑞と呈し具不行圖を叙る。浄土論兩卷と著し遠く龍樹天
 親の法門と説じ。近く曇鸞惠遠の心をのべ大小浄土を尊崇し明子昌
 言と示も。文旨要と該諸の化範と詳くす。其化導と蒙の年々わたりて
 益さんなり。道綽浄土と宗として。坐すも常小西に向い晨宵假し西
 と後(ち)も。六時篤行敬行して。行と缺(ち)も。行住坐卧念佛止して。日々
 小七万と以て限ると。沙門道撫と之の名勝の僧京師より来り。玄忠寺二
 つら。道綽小調して浄土の行業と同ふ。共み淨教と弘通せり。道綽今年
 八十四と神氣明爽なり。已上續高僧傳の大意也

道綽禪師ハ西河とす所生きり。晋陽文水縣の石壁谷玄忠寺小住り。小

故小西河禪師と号し。又後玄忠と号し。玄忠寺ハ曇鸞大師の建立とす。
 浄土論下曰。沙門道綽法師ハ并州晋陽の人なり。乃ち是前高德大誓法師。
 三世已下の懸孫の弟子なり。涅槃經一部と講を。常小巒法師の智徳の
 高遠なりと讚嘆も。自ら云相去ると千里懸殊と尚講説と捨て。浄土と修
 じ。已小往生と見る。況や我小子の知ると解ると。何れ多し。此と將て
 徳ともし不足んと。大業五年より已来即講説と捨て。浄土の行と修す。一向小
 専ら阿弥陀佛と念じ。禮拜供養相續して間(ち)も。貞觀己来有縁と開
 悟せん爲小。時々無量壽觀經一卷と敷演して。并土の晋陽。大原。汾水。三縣
 の道俗と示誨も。七歳已上は小弥陀佛と念じ。と解る。上精進る者
 ハ。小豆とて敷して。弥陀佛と念じ。八十斛あり。九十斛と得。中精進
 る者ハ。五十斛と念じ。下精進のものハ。二十斛と念じ。諸の有縁小教とて
 西方小向く。淨土便利せん。西方小背て坐卧せしむ。安樂集兩卷と撰て



三國七高僧傳卷二

世不行。貞觀十九年歲次己巳四月二十二日。悉く道俗と別を告ぐ。三縣の内の門徒別ふ就て前後断を。數と記すとて難し。廿七日に至て玄忠寺におひて壽終。乃ち白雲西方より來るあり。變じて三道の白光より。自房の中に於て徹照通過して終に託る。乃ち滅後墳陵を燒時復五色の光三道空中現して日輪映し遠る。乃ち託る乃ち止む。復紫雲三度墳の上にお於て現るあり。遺從の弟子同此瑞と見ると云。又淨土往生傳に依る前高僧傳に見えり。道撫法師久しく玄忠寺に有てその後寺に去る時。道綽禪師と互に離別の情を。淨土の再會を期して他國少赴。疎遠なりし道綽の往生したまふとて三日過く聞ひて曰。吾常ふ行して道綽先主と思ひに何乃ち後々吾一息の功と加くと見佛の期を迫ると。即時に彌陀の尊像の前より頭を叩き發露懺悔し。退きしに往生の座に就く。忽ち終ると。瑞應剛傳。新修往生傳。佛祖統記。

諸上善人詠。等の傳にか大よむ。又善導和尚とて道綽の御弟子ありて。晋陽の九品道場あり。觀經を演じし時。始く師弟の契約あり。即ち觀經を授与し及び淨土の法門と相兼しむ。乃ち善導和尚に不待時の別祝あり。忽ち三昧發得し。出定入定了了分明ると。散心の眼前にも淨土の聖境と拜見し。况や入定の日。彌陀如來に對面し。道綽の師なりとて。亦三昧を發得し。是故に或時善導大師にお問なす。我に決定して往生と得てんや。有らん。善導大師とて。一莖の蓮華とりて。佛前の乾る地お拵て七日の間行道念佛せん。若蓮華萎む。樵もん。乃ち往生決定せん。あれ。道綽禪師頓て教ふ任せ。一莖の蓮華と佛前拵て七日行道し。乃ち所す七日の間。此の果然とて。萎む。悴む。乃ち次第に色鮮なり。道綽大に觀喜し。偈に我往生決定なりとて。稱念佛し。乃ち

唐高僧傳瑞應傳
新修傳の大意

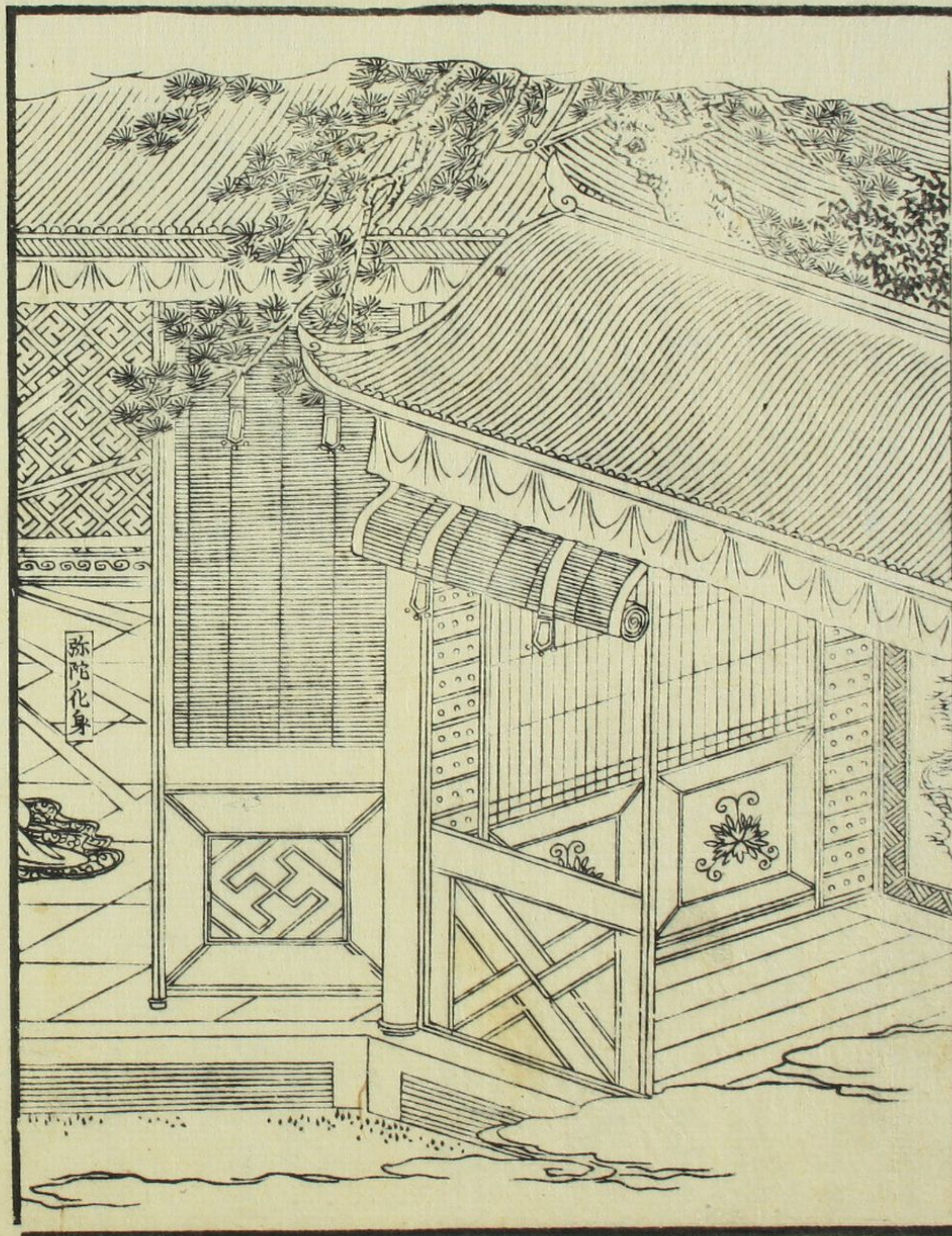
一説ふこれ不審あり往生の障ハ疑心より甚しん。夫道綽禪師ハ三
 信三不信と慙不釋して他力の信と人ふ勸めたる然不往生と得へや得ま
 と尋ふ疑心なり。善本修習若存若亡と。疑佛智とて往生の障と。
 何ん況やかくの。大疑ハ往生の障をぶるといふ。尤然あり但疑心ハ二
 あり。安心の疑ハ實ハ往生の障なり。起行の疑ハ往生の障とす。具如三心要集
 今道綽の疑ハ安心の疑ハ起行の疑ハ不。是疑不似く疑ハ不。是疑不似く疑ハ不。是疑不似く疑ハ不。
 その故ハ信心決定の人往生ハ勝解作意と起とす。未真實作意
 と得と茲とて聖教の道理と聞て。決定して疑とて。直ハ淨土の
 聖境と見ど。又佛の告と得と。然るハ真實ハ往生と大加思ふ
 故ハ良し。それハ加様の疑あり。往生と大切と思ふ。唯人々の願心なれば
 此疑ハ。譬ハ貪欲の深人。他人より金銀と得る約束とて券契と
 受取とれば。其金銀と受取と少しと疑と生ぜば。未手とて。未手とて。未手とて。

若ヤ失却とせん。用心して日夜朝暮心より極く。寤ても覚ても忘るる
 如く。又无欲の人ハ忘れとて。言出とて。往生と願ふ心と
 此れ同。善導淨土と貪せざる。无上解脱の障とす。是ハ一大事の往
 生曠劫の大慶と行住坐卧心より。思ひ。甚有る事なり。
 又曰。或時善導ハ告く。宣ハ願くハ師定ハ入。道綽ハ決定して往生
 とす。や否や。阿弥陀佛ハ尋ふと有れば。善導大師即定ハ入。観念し
 給。御丈十丈計の阿弥陀佛出現。観見。是ハ依て。向。六
 道綽ハ現。念佛三昧と修と。決定して往生と得ん。又何の年月より
 往生とす。と得んと有れば。阿弥陀佛の御答。樹と伐。連。谷。下。縁
 うんハ共。語。家。還。ん。ハ。苦。と。辞。と。云。又。道。綽。ハ
 三の罪あり。此三の罪を懺悔せしむ。一ハ佛像經卷と擔。牖の下。安置し。
 自ハ深房の奥。深。居。と。二ハ。起。五。塔。寺。等。の。功。徳。と。營。み。て。

受戒の出家比丘大僧は馳使ひ策役と。三は屋宇と營造も亦其の命と損ひ
 傷る道綽ひし此罪と犯す。久く懺悔せむ故に罪益重し。第一罪三百
 五十戒の中の衆学。第八十五の女佛下房戒と犯す罪なり。今時の行者平居
 坐卧の處に佛像と安置して褻瀆の罪と得る。在家無戒の者も亦之。
 恭敬修と欠くも不念佛の信者の作業あり。祖師の教ふ背く。況や道
 綽大僧の身と犯戒の罪なれば。十方の佛前ふ於て第一の罪と懺悔とす。二
 第二の罪は具足戒の中の掘地戒の所制と犯すの罪なり。道綽ひし寺と違ふ
 塔と立るとして受戒の比丘大僧と馳つて律制ふ順せと。俗士の奴婢を
 役も亦如し。諸の比丘衆道綽不馳つて心より犯戒も亦多し。責
 一人不帰も亦れば。皆道綽の罪なり。故に四方の僧の前より第二の罪と
 懺悔とす。也。第三の罪も又波逸提の中の掘地戒と破るの罪なり。是又
 比丘大僧の宜ふ處なり。故に一切衆生の前ふ於て第三の罪と懺悔と

す。一と也。まれば此三罪は具戒中の犯戒の罪なれば。道綽の智行兼備る身上
 みての翹壁の瑕のごと。今時の出家の擧足下足一語一点念の起不起三業悉く
 犯す。道綽の御身その違制罪と加ふる故に及て。今時の僧より重し。係
 あり。此三罪と懺悔せし佛勅あり。見れば其外は罪業芥子なるも
 其の事あるれり。又曰道綽の三罪は往生の障なり。若し若しとて念佛の功德
 逆惡高滅と況や其餘の罪と。若し三罪實に往生の障への經論說皆妄言と
 なり。罪惡凡夫の往生の望と絶との心得べし。云ふこの義は附て古來より
 さぬ。説あり。此中實に往生の障なり。然るも如来抑止門の方便あり
 といひ。又道綽は上品往生の扱なり。故に三罪障なり。若し下品の往生なれば三
 罪障なり。彼も亦是の他力真宗の意あり。又或説は三罪は業事成
 辦の障なり。往生の障なり。此義甚深なり。道綽の三罪ありて往生

善導觀經
注四帖の疏を
著すの事毎夜
弥陀佛來現
指授あり



國七高僧傳卷一

善導或時心小思惟。給ふ九佛の教。隨祝得益。して祝欲小隨つて設くる
 教。若し若し法相應せぬ。た。功。然れ。吾子有縁の法を求んと
 思ひ。則ち經藏の中へ。我子有縁の法あり。授けな。と。眼と。一心
 手小ま。探。觀經と得たり。諸。有縁の經。有。大。喜ひ。心
 讀誦。習学。一。介。後。道。綽。禪。師。の。晋。陽。と。觀。經。と。演。話。した。ま。う。は
 聞て。貞。觀。十。五。年。九。十。里。と。遠。と。せ。び。て。道。綽。の。所。小。つ。つ。て。志。と。展
 乃。中。道。綽。も。か。ら。觀。經。と。授。け。た。ま。は。是。觀。經。に。有。縁。の。經。上。小。今。ま。い
 道。綽。より。相。承。た。ま。は。因。縁。の。深。厚。る。事。と。い。ひ。夫。より。觀。經。を。つ。て
 三。昧。發。得。し。定。中。小。於。淨。土。の。依。正。の。莊。嚴。と。并。見。し。う。小。出。定。入。定
 又。東。都。の。擇。英。法。師。花。嚴。經。と。講。と。し。て。四。十。遍。道。綽。禪。師。の
 道。場。小。入。く。三。昧。小。遊。ん。で。歎。じ。て。曰。自。恨。多。年。空。文。疏。と。た。づ。わ。て。身。心。の。勞
 も。耳。何。ぞ。期。や。ん。念。佛。不。可。思。議。と。り。と。善。導。曰。經。小。誠。言。あり。佛。豈。妄

語。又。善。導。平。生。常。樂。を。食。も。毎。に。自。責。て。曰。釋。迦。尚。乃。分。衛。す
 善。導。何。人。ぞ。端。居。り。て。供。養。と。索。ん。乃。至。沙。弥。と。び。小。禮。と。受。む。彌。陀。經
 と。寫。と。し。て。十。万。卷。淨。土。の。變。相。と。画。き。り。と。し。て。三。百。鋪。見。る。程。の。塔。廟。修。理
 と。加。へ。り。佛。法。東。行。り。己。未。未。善。導。の。如。此。盛。德。あり。夏。の。瑞。應。傳
 新。修。往。生。傳。中。小。曰。唐。の。貞。觀。中。道。綽。禪。師。方。等。懺。を。行。ひ。及。び。淨。土。九。品。道。場
 小。觀。經。と。講。と。し。て。大。喜。び。て。曰。此。真。小。佛。道。小。入。の。要。津。餘。の。行。業。の
 迴。遠。く。成。難。唯。觀。門。速。小。生。死。と。超。る。の。捷。徑。吾。これ。と。得。り。と
 是。小。於。篤。勤。精。と。頭。然。と。救。ふ。如。く。續。て。京。師。小。至。て。四。部。の。身
 子。と。驚。り。勸。め。貴。賤。を。隔。ど。彼。屠。沽。の。輩。小。至。る。手。で。普。く。開。悟。を
 又。堂。小。入。て。合。掌。し。跪。き。て。一。心。小。念。佛。と。力。の。竭。る。小。非。せ。れ。休。む。寒
 冷。も。汗。と。流。し。此。行。狀。と。以。て。至。誠。と。表。と。出。て。則。人。の。為。小。淨。土。の。法。と。説。て
 あり。の。道。俗。と。代。り。道。心。と。起。さ。淨。土。の。行。と。修。せ。し。も。益。も。利。益

せりてあし三十余年震處と設ど志も睡眠せん洗浴と除き
 曾て衣と脱む般舟行道禮佛方等と以て身の勤く守戒品と護持して
 毫末も犯さば目と奉て女人と見む一切の名利心不念と起すば假も綺詞
 戲笑せば往処争て供養と申飲食衣服の四事豊るれも皆自然の心とて
 他は施し好食あれば大厨ふ送ると徒ふ供養其身の唯蔬食とすらし
 僅は身体と親いて足すも乳酪醍醐のみ飲嗽せばあはる暇施の
 將て料紙して阿弥陀經と寫すも十万余卷画くもその曼陀羅三
 百餘又破壊せし伽藍あり故き塔塔の類いも悉く修理と加て
 營造し燈と淨明とつと歳常ふたものあり三衣瓶鉢と人小持
 せば洗のせし尤姑終改るるも又諸の有縁を化度して常は自ら
 行大衆と共に歩行のせし人と連立かけ世間の話をいあて行業と
 修も妨有るるも其暫く礼謁と申す法と説と聞あはる道場小

預て親く教訓と承け或は曾て見聞せしれも其教義と披き尋りて
 浄土門小入あり或は展轉して浄土の法門と授き其小修するあり京師
 諸州の僧尼男女或は身と高き岸より投ぐ命と捨又深き淵小命とす或
 高き樹の枝より墮或は身と焚て供養する者畧四方小聞ゆる者百餘人
 又妻子と捨て阿弥陀經と誦するも十万余遍至る者又阿弥陀
 經と念して日小一万五千より十万余遍ある者あり念佛三昧と得て浄土
 小往生するもの數と知るべし或は善導小問て曰念佛して安小往生と得
 るやと答曰汝の念する所のごとく汝の願する所と遂むと對へて善導も自ら
 自ら阿弥陀佛と念するも斯の如く一聲一たまは則一道の光明あつと
 其口より出十聲百聲光明又此のい善導人小謂て曰此身厭を
 諸苦逼迫して情偽變易するも誓も休息するも乃ち住する所の寺の前
 るる柳の樹小登り西小向いて願て曰願くは佛威神顯りて我と接し觀音

勢至亦未て我と助け。我との心正念と失ふ。驚怖と起る。弥陀の法中に於て以て退隨と生ぜしむ。願畢く其樹上より身と投じて自ら絶る。時よ京師の士大夫誠と傾け。帰信して咸其骨と収め。以て葬る。高宗皇帝其念佛の口より光明出く。又捨報のとれ精至かくの如し。と知し。寺額と賜て光明寺と号とす。浄土往生傳中。浄土宝珠集四。浄土文五。衆邦文類三。蓮宗寔鑑四。佛祖統紀二十七。浄土指飯集下。諸上善人誄往生集一。等よ善導大師の傳と載て。全く上よ奉る。新修浄土往生傳と同一とす。

偕此善導大師。前より言る如く。幼少ありて。密洲の明勝法師に後に出家し。法華經維摩經と修學し。自ら思す。佛經の教門若し。よして道一途あり。若其機小契とん。勞して功あり。夫より經藏に入り。やうひ。目と閉手あきらめて。それと探す。我有縁の經をく。やうひと

念じて。浄土の觀無量壽經と擲り得る。大に喜び。觀經の十六觀法。於恒不思惟して。唯西方小心を注ぐ。終南の悟真寺小迹とす。後道綽禪師小見えて。專念佛一行と自行化他す。六十九歳に寂とす。乃る。程小善導大師の御師。道綽禪師より。弘願他力の真面目と授け。御自身の往生の決得し。觀無量壽經の十六の觀法を説たる。ゆえ。亦よ。名高き天台大師に始とす。淨影大師嘉祥大師より。云高僧方より。自力の眼より。觀經と見損ひ。自力修觀の經と見ぬ。改さむ。し末世の愚痴る。衆生自力小迷ひ。折角小弥陀超世の本願。小値をく。た人ハ飯搗と枕して。餓死する。小齋く。空く。生死小流轉せん。と憐る。ひて。十方諸佛。小證據と乞願する。ひ。觀經の四帖の疏と作る。古今と指定とる。と大言と吐く。末世濁世の衆生。往生の道小迷。ざる。やうひ。御一代の製作。ハ觀無量壽經疏四卷。法華讚二卷。往生禮讚一卷。觀念法門一卷。飯每

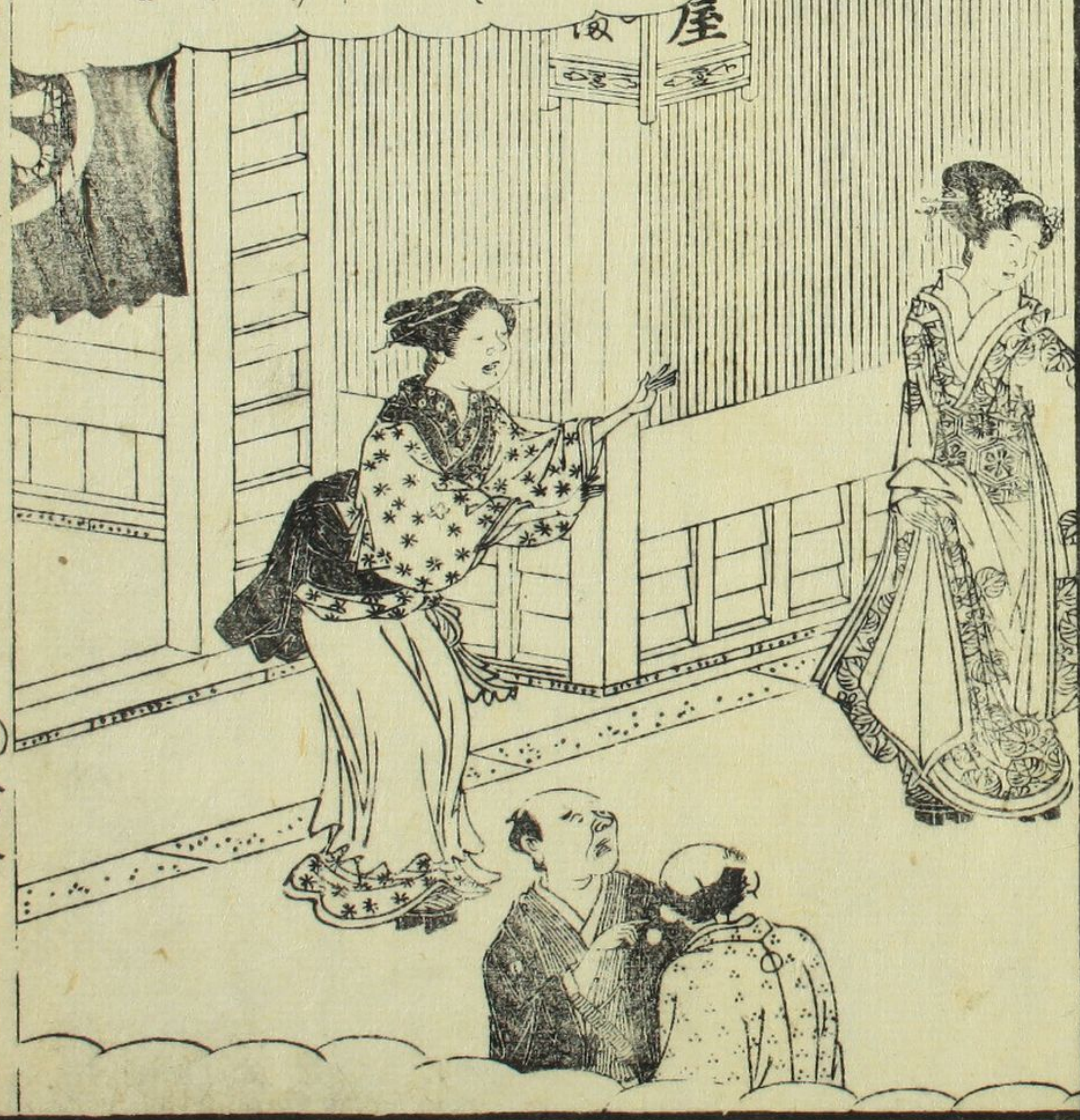
讚一卷。臨終正念誅一卷。勸化徑路修行頌一首等。現世は行する就中觀
經四帖の疏。第四卷の尾自ら感づぬ。靈相と記し。曰。敬一切有縁の
知識等。小白。余は既まこれ生光の凡夫。智慧淺短。然るも佛教幽微。して
敢て輒く異解を生じ。遂に即心と標し。願と結んで。靈驗と請求め。方は
心と造るべし。盡虚空遍法界。一切の三寶。釋迦牟尼佛。阿彌陀佛。觀音。勢
至。彼土の諸の菩薩。大海衆。及一切莊嚴相。等。小。南無。歸命。上。某。今
此觀經の要義と出。古今と指定せん。欲と。若三世の諸佛。釋迦佛。阿彌
陀佛。等の大悲の願意。小。稱。願。夢中に於て。上。願。所の如く。一切の
境界。見ると。と。得んと。佛像の前。は。於。願。と。結び。早。日。別。阿彌陀經
と。誦。三。遍。念。佛。三。万。遍。して。至。心。發。願。と。即。當。夜。小。於。西。方。の。空
中。と。見。る。小。上。の。如。き。の。諸。相。境。界。悉。く。顯。現。と。雜。色。の。窟。山。百。重。千。重。種
種。の。光。明。下。地。と。照。と。地。金。色。の。と。中。小。諸。佛。菩。薩。あり。或。坐。或。ハ

立。或。ハ。語。或。ハ。默。或。ハ。身。手。と。動。或。ハ。住。と。動。う。さ。る。者。あり。既。此。相。と
見。て。合。掌。して。立。て。る。良。久。と。覺。覺。已。て。伎。喜。小。勝。快。と。觀。經。の。茂。門
と。認。む。是。より。已。後。毎。夜。夢。中。小。常。小。一。僧。あり。て。來。て。表。の。科。文。と。指。授。を。
而。して。更。又。見。び。後。時。下。書。と。書。り。て。復。更。小。至。心。小。七。日。と。期。して。日。別。阿
彌陀經と誦。と。十。遍。念。佛。三。万。遍。初。夜。後。夜。小。彼。佛。の。國。土。の。莊。嚴。等。の
相。と。觀。想。して。誠。心。小。一。經。法。の。如。く。と。當。夜。即。ち。三。具。の。磴。輪。道。の。邊。獨。轉。と。と。と
見。る。忽。ち。又。白。駱。駝。小。乘。來。り。て。前。ん。で。勸。め。ら。り。と。師。當。小。努。力。て。決。定。往。生。と。と
退。轉。と。と。と。此。界。ハ。穢。惡。と。苦。多。貪。樂。と。生。せ。ん。と。答。て。言。大。小
賢。者。の。好。心。の。視。誨。と。蒙。る。某。命。の。畢。と。期。して。敢。て。懈。慢。の。心。と。生。ぜ。ば。と。云。
第二の夜阿彌陀佛身真金色。と。七。寶。樹。の。下。の。金。蓮。華。の。上。小。在。り。て。坐。し
少。い。十。僧。圍。繞。して。亦。各。坐。と。佛。樹。の。上。小。天。衣。を。繞。り。と。見。る。而。て。正。し。西。小
向。て。合。掌。し。坐。して。觀。奉。る。第三夜。兩。の。幢。打。極。く。大。小。高。く。して。幢。ハ。五

酒ハ正念を乱し、そのついでに
 小乗の教ハ草の葉ハすく
 ひ上ても飲べば、見る見えれ
 ども、原来性罪ハ非ぞ、以て
 罪をうと、俱舎も見えず、
 されば時の目ハ躍ひ、縦ひ飲
 有とも、心念と共、そのついで
 本意とすべし、又密積經
 一、まじり、女人ハみれば、眼の
 功德ハ失く、といひ、縦
 大蛇と見、そのついで
 女人を見、そのついで
 と、或ハ女人ハ
 百悪の長と、藥師
 本願經ハ出
 たり



尤是ハ小乗の
 教ハ、そのついで
 肉食妻帯の
 宗旨を、そのついで
 坊主あると、振
 立酒池肉林の
 貨食亭、そのついで
 或ハ遊女の午と、舞
 柳巷と、戯歩行、
 畢竟祖師の顔
 小泥を塗、そのついで
 嗚呼唯出家ハ出
 家ハ、殊勝の
 挙動、そのついで
 け、そのついで



色と懸く。道路の縦横人を觀るる礙るも不見る。既小此相を見己して即便
 休止して七日おひひ。上來あゆる靈相の本心物の為ふして己身の為ふせず
 既小此相と蒙りて敢て隱藏せむ。謹て以て義の後ふ申呈して聞て末
 代ふ被らむ願くはこれと一切の衆生不聞して。信生せしむ。有識觀者
 して西ふ歸せしん此功德と以て衆生不廻施して。悉く菩提心を発し
 慈心と以て相向ひ。佛眼と以て相見。菩提の眷屬として真の善知識
 とらん。同淨國不歸して共小佛道と成せん此義己お證と請て定早ぬ
 一句一字加減をへうば。寫さんと欲する者ハ一經法の如くをよ應ふ知るべし。
 と書置たまふ。尤是より前の高僧方の佛の正意不違ひとて。是非
 是以上と如く。淨影大師天台大師等の高僧觀經と見損ひ。佛の正意は
 らんぞ。五逆十惡具諸不善の惡人女人を本とらる。超世の願意とて。ば
 上品大衆の善人とて云て假ふも極惡の凡夫の為の經とて。ば為未來世一切

衆生爲煩惱賊之所害者の釋迦の正意も隱没して頭れんと。善導大師
 古今と指定ましく淨影天台等の謬解と糾。佛の正意二尊の賜と探りて。
 注釋したるあり。誠小善導大師一代の化導と著むる其自行とて。頭然と
 拂ふ如く佛前小向ふて念佛は。寒天小汗と流し力を尽して暫く
 ち休むも。三十余年の間一夜と寢所不入なれば。帶紐脱く小き小卧たすと
 か。行水の外衣と脱るるも三十年の間目とゆきを女人と見を一切の名利と離れ
 假ふも戲まの言う。あまもと言間あれば念佛とて。眠る間あれば称名相
 續たるも實小を行行狀の堅固とて。双ぶ人ると云へり。問云そ行行狀ハ
 全く聖道の行ふして。横川大師の外儀の相は異りと言ひ。又男女貴賤悉
 弥陀の名号と称するも小行住坐卧もあまなれず。時處諸縁も隔るるといふ
 相違とるも非ざる。答て云。是ハ畢竟僧分の行儀なり。尤それ頃ハ聖道
 盛ちるといふも。行狀嚴くせん。人の信仰うまが故ふ。先自行と堅固

佛身光明と放く善導の口より出たす尤善導の化導深切なりと云ふ
末世の衆生疑ふ事多し是と晴らん為ふ經藏と盲探ふはのひ又十方の諸佛釋
迦彌陀二尊の證を請ひ四帖の疏と書ひ又毎夜一人の僧來りぬ
玄義の科文と指授し是則極樂の教主阿彌陀如來の指圖を依心して
善導が了簡あはれども寫して拜見せんと思ふ徒ハ佛經の如く敬い一白一
増減とくべ。説の手信せし宣ふ。觀經ハ釈迦の直説とれと阿彌陀如
來の御指圖よりして書たる程とある。三昧發得の善導の御教化し
いまも疎はるけれも別とて大切なる御教化よりいふ云々。天台大師妙宗
抄と作りて觀經と注釈しぬ。淨影嘉祥も注釈と加へるも唯十六觀法
と説きて佛の本意との心得と隱彰の實義と知り下品臨終の
十念をて往生と説きた。散乱の念佛あり。正しく觀念の念佛の功德
の勝る故なりと云ふ若し今日の衆生平生より定水と疑ふ識浪頻ふ

動さ。心月と觀るとん妄念の雲覆とて靜る暇なし況や臨終断未魔の苦
火の車小腰とくける者何ぞ觀念ふ堪ん然るも善導大師佛の正意と
窺ひ給ひて汝若不能念者称南無阿彌陀佛とあれ觀念する能は
火車とて南無阿彌陀佛と口称へて往生するも善知識の勧めと聞て
如是至心と稱するの往生とて心を受へ一念を往生一定して具足十念
の称名のや往生治定の上の佛恩報謝の称名されば下中品は聞己
即生と説きたり聞一念を鑊湯爰とて涼風となり爐炭化とて光蓋となり
釵の樹ハ七宝樹林。火の車ハ金の蓮華。牛頭馬頭の獄卒ハ觀音勢至二十五の
菩薩と轉じて花々々往生と遂る八十称の念佛と釋して現在火車の迎
と受へ極重の悪人なれも臨終の十念して往生と説く六別時意の方
便なり今直に往生するも子あり。遠生の結縁なりと撰論家より難じり
故に善導大師會通して今世觀經の十称の念佛八十願ありて十行具

足す。云何具足なる南無と云へ歸命なり。亦是發願回向の義阿彌陀佛と云へ
 即ちの行なり。此義と云つての故に必往生と云ふことと得と釈し。凡夫の稱方
 カ子ありす本より六字の名号に願行具足しと云ふと聞くと信する一念に
 發願回向しと云ふ大願業力の働くと明ららる。前高僧の上より
 ても古今指定の疏と著して佛の正意と願とも善導獨といふも妨
 あり。此觀經は曇鸞大師へ菩提流支三藏より付属の經にて道綽禪師
 安樂集の據も又觀經を以て取と望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名
 と恐るも又突出して弘願他力の本意とあり。善導一師なり。尤此觀
 經は大經と違ひ。自力の眼より八分で難き經なり。凡三部經の説相と云へ大
 經八十五夜の月に一頁の曇と云ふ如く弘願眞實の月明り。小見ゆ相其
 村雲のかきて月不暈のあま如き。阿彌陀經の曇と云へ。眞門の月八見と云
 あり。未自力の曇と云へ。弘願の月を定散の黒雲に覆と云へ。則觀經の説

相も。此經に隱彰顯密といふこと。頭説の方九。自力の觀念彰
 の字と云ふ。時その定散の村雲の中。弘願の月がちりくと光と見
 せ。是本法藏比丘願力所成と。四十八願の月影と見せ。念佛衆生攝取不
 捨と十八願の月眞丸と顯れ。又若念佛者當知此人是人中芬陀利華と云
 と影と拜ませり。全く夜明の月の入際。汝好持是語持是語者即是持
 無量壽佛名と。村雲の曇と云へ。暗く南無阿彌陀佛の満月と云へ。西の空
 隱る。其月の實躰と見附たり。古今少あり。善導と云へ。明く見
 出。尤龍樹天親の二大士。曇鸞道綽の二師とも。是知の。凡あり
 り。明小なり。其中小なり。勝れ。論語の中に德行は顔淵閔子騫
 等と四科を立て書たれども。顔淵閔子騫の徳實より。曾子子路等
 不徳なりと云ふ。非を皆徳に備たれども。就中勝る方と取て上り
 者なり。往昔釋尊十大弟子の中に天眼第一の阿那律頭陀第一の迦葉



舍利弗目連
 神通をくまひ



三國七高僧傳圖繪卷三

神通第一の目連智慧第一の舍利弗等。其れ舍利弗ハ智慧第一と
 具へて神通第一といふ。智慧第一ハ神通と得ざる。目連も神通
 神第一と得ざる。其れハ智慧第一ハ神通と得ざる。目連も神通
 第一と稱する。大論の四十五卷目。釋迦如來無熱池と云ふ池の邊に
 御身あり。弟子達の本業因縁と説く。五百の羅漢も其會に列せ
 然る。舍利弗ハ入參着る。其れハ釈尊目連を命じ呼來すと宣ふ。佛勅ハ
 鳥の飛が如く。祇園精舎より。佛勅の趣きにつげぬ。折り舍利弗袈
 裟と縫て居る。暫く待たる。此袈裟と調へて行へ。目連ハ
 目連ハ得ざる。待たる。良時。目連も待たる。待遠思ふ。其れ
 年とつて。彼袈裟とつと撫られ。忽袈裟の仕立調へて。出未
 其れハ奉りて急ぐ。其れハ時舍利弗目連の神通と試んと。一條の帶と
 大地に落し。其帶と取て。其れハ同伴と。目連何と氣づく

其帶小手と云ふ。大須弥山の如く。地引つて動く。目連禪定に入
 大神通と起し。よん。大地震動し。動く。此時如來の所居た
 橋陳女。何れハ斯ハ大地の震ひ候。如來子問奉られ。釋尊宣
 是ハ祇園精舎に。舍利弗の帶とよん。目連ハ大神通と振ふ。故
 目連震動も何れ。目連ガ力よ。其れハ成。有然
 舍利弗も斯神通有る。其れハ一分。當て稱する。時目連と神通
 第一。舍利弗と智慧第一。其れハ如何。何れハ疎。觀經の云
 彌陀釋迦諸佛三佛の正意と頭。善導大師の御手柄。其れハ
 或問曰。善導大師三十余年睡りぬ。大師ハ云。但睡眠ハ欲求の
 衆生。其れハ能く。故に觀經ハ唯除睡時恒憶此事。大師の睡
 眠。其れハ机と失する。過り。答て曰。大師の睡眠。其れハ八
 らぬ。非。三昧發得。常ハ三昧正受。入定散自在。故に自睡眠

色界無 小睡眠うらやみ如し。亦れも欲界の衆生小睡眠欲あり。
 何ぞ睡ざらざるや。あてて大師の往生禮讚子唯除睡時常憶念といふ。
 又或人法然上人念佛の如く睡ふをされて行と急侍りといふ。此障と云ふ
 侍人と申すれば目の覺たんと念佛しつゝ昏られる甚尊と云ふ。
 又善導大師は目と奉て女人と視つゝと言ふ。是別して身業の過を防
 ぐを明し故に黒谷七茶の中にも此行狀の趣本律の制も過ると
 言ふ。向日大師の女人と見ざる身過を防ぎなまざり。宝積經云一見女人
 失眼功德少し。縱雖見大蛇不可見女人といふ。若尔ら大師の自行
 亦も。恐る化他と失せん他力本願の正意極悪の女人と度も大悲の至極と
 頭とせり。都く女人の百惡長願經出。障道の目縁なり。故に經云五障三
 從の法華に五障と明し大論九十九の三後と明し又超日明三昧經云並五障三從
 人師八十惡と數ふ南山の南心戒觀法三歸元真指下第九。或は女人の地獄の使能斷佛

種子も云ふ。此を以て弥陀の別願極悪と化すと云ふ。女人の定めて往生さる
 ばと疑ふ。故に別して女人往生の三十五の願と云給ふ是則深重の大
 悲の至極なり。女人と捨つる。亦れ善導大師の自行の恐る聖道ゆ
 たる御方すひす。他力眞門の正意あり。答て曰超世本願の不思議
 重障の女人と清い給ふ。理在絶言なり。但善導の女人と見ざるは弥陀
 の大悲違背し。女人と捨つる非む。又身業の過を防ぎ自行と慎む。非
 非ど元より弥陀同体の大悲のあり。御出世るは善導の女人と見給
 ざるは女人と憐る。大悲の説法なり。其故に重障の女人往生するは本能の
 大悲止むを得ざる。故に假令信ありて念佛せんば女人と見ざる者云
 ふ。あは然る。今時の女人を念ふ。念佛する時善本修習の思はく。自
 力難善の執情を離る。まて知識を親しく迫り。得法投扱を以て。公
 負て他の不信者と謾に我賢と云増上慢と起る。法然上人

大戒をうたふ此の心より安んずる。自力定散の祝するて往生せむ
 彼美好し。女の性ハまふひかり。人我の相よく貪欲甚く。物の理とまふは只
 迷の方ふ心もく移り。詞もたふ苦く。ぬ事も問は言は用意あり
 見え又浅まらして問は言出も。深く欺り飾と事ハ男の
 智恵も勝るると思へ。其も跡より顯るるを知ると直まらばと拙ま
 者ハ女なりと云。後然すこまらん。又女人と出家し誦經念佛し若ハ受戒持齋せむ者
 ハ我慢心を發し。人我を高ぐ無戒の出家と見てハ。謗謔をまけ多し
 己ろ失顧る。空腹高心と信心の少もか。されば百歳の老比五尼より
 也。今日初發心の沙弥の足とて。禮せし佛ハ宣へり。今時の比丘尼の發
 心修行ハ法滅の因縁する。と知る身と高ぐて實ハ浅まらば事なり。
 毘尼母経の意。女人ハ心詣曲り。法器小あり。びとて出家と許し。なぞ。
 釋尊の姨母憍曇弥。摩耶夫人。阿難や近づく。出家と願ひ。とて釋尊

許し。其時憍曇弥五の恨と奉て釋尊と恨たまふ。是少つて如来止ま
 得も出家と許し。此時同時小女人多く出家せり。されば如来の正法一千年
 住まふ。女人ハ出家と許し。不正法五百年ありて滅せり。それハ女人
 の出家ハ法滅障道の悪縁とる。三宝紹隆の善縁ハ非ざりし。尼僧
 頂とて撫て慙愧とす。故ハ善導大師ハ他力還相の大悲とあり。は女人と
 見給り。故ハ諸の女人身と顧て慙愧し。實ハ一代教の中も嫌はれて在
 處も擯出され。女人ハ破ら石ハ再び合するも。火の中に蓮と生ず
 とも女人ハ水く成佛せむ。あつ小弥勒如来起世別願の大慈とく。佛智の
 不思議とあり。て女人成佛の誓と成り。故ハ一念發起のとも。小不可思議
 の能力とて。往生と治定し。臨終の夕ハ變成男子の姿とあり。紫磨黄金の
 膚とあり。三十三相の形とあり。忽弥勒大會の中ハ入王。弥勒同体のさりと
 頭。無上涅槃の佛果と証げんと。却ハ他力の佛恩とあり。南无阿弥陀佛く

と称名と喜ばらん為小善導の目と挙て女人と見のまらる也。然バ女人と
若ハ吾身の拙く障り重きと改悔して佛恩の称名とまらるる也。

三

斯く善導大師一代の行化とぞ終る。唐の高宗皇帝の永隆二年辛巳三月

廿七日帝五年代或十四日新修春秋六十九歳して往生する。日本四十四代天武

天皇白鳳十年小あま洛東禪林寺に毎年三月十日曾善導忌を修す

右入滅は付て二説あり。新修往生傳の意ハ一時住りて長安の寺院明光

まおつて浄土の變相を寫しつゝ急小催促して成就せしむ。あま人其力を

問ハ則曰く吾まらふ往生せん。住りて三夕のま忽然して微疾

ありて室と掩ひ。怡然して入滅しぬを語り。又蓮宗宝鑑ハ新修傳

の意ハ忽々人小謂て云く。此身厭べし諸苦逼迫。情偽変易暫くも休息

とぞ。吾將西小皈らん。則光明寺の前なる柳の樹に登り西小向

發願して終りて其樹上小於て端身立化し。身と投りて絶るとぞ。端身立化

とハ柳樹の上小まて合掌發願して終りて靈神化して浄土小生じ神已と云

故小尸地小落と。身と投りて自絶と云。京都の士大夫歸依仰信して

骨と収りて葬る。高宗皇帝其念佛をれり光明の出を知り。又捨

報の時精進至誠とてと教聞し。寺の額と賜りて光明寺と号せり。

斯の如く兩説ありとぞ。大権の聖者の入滅ハ祝縁小隨と見と異り。又

龍樹の入滅ハ二説。天親往生の二説縁小順を化と説く。一准と云と云。

但捨身とてと。今時無智の僧の縊れて死するの類ハあは傳文と

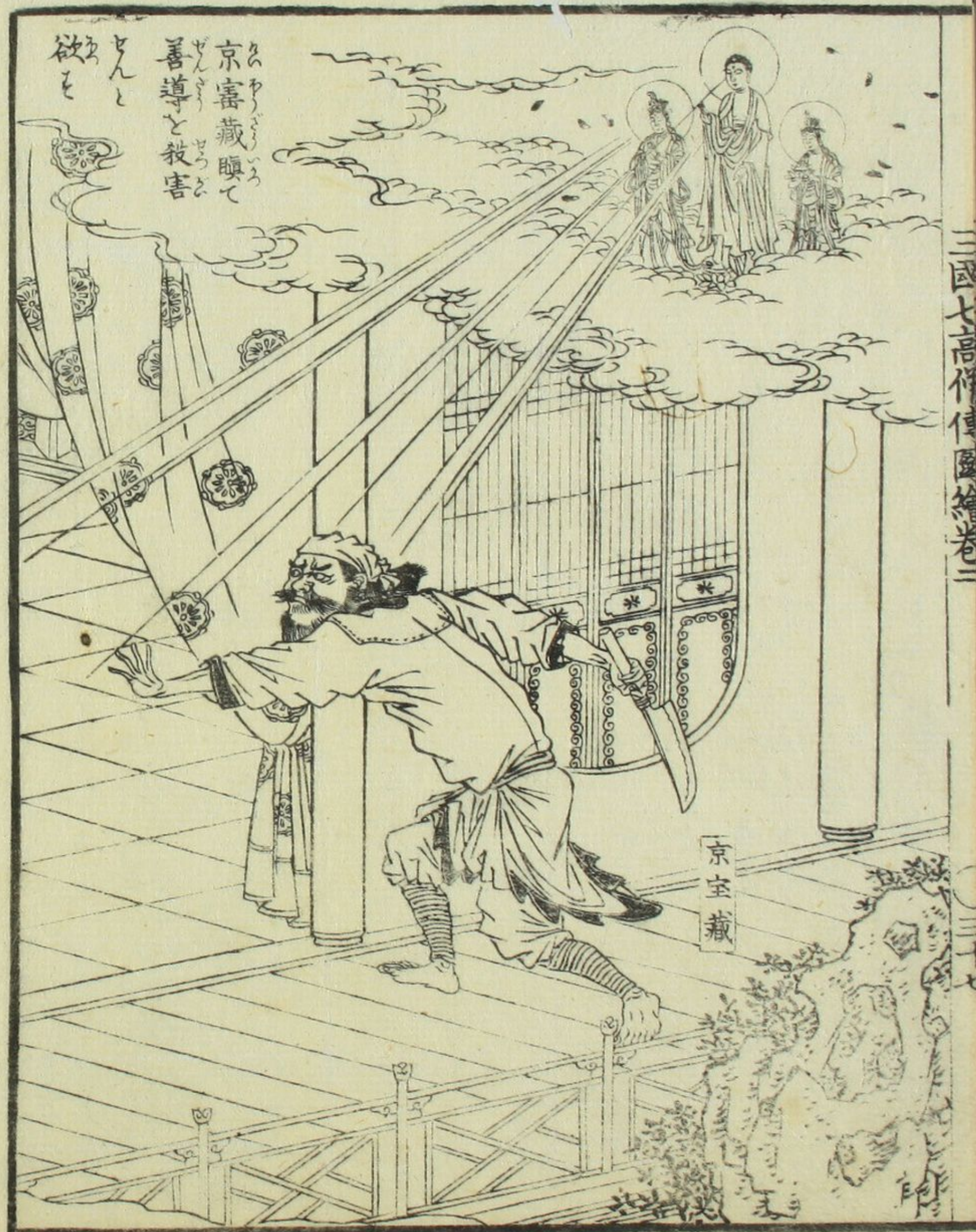
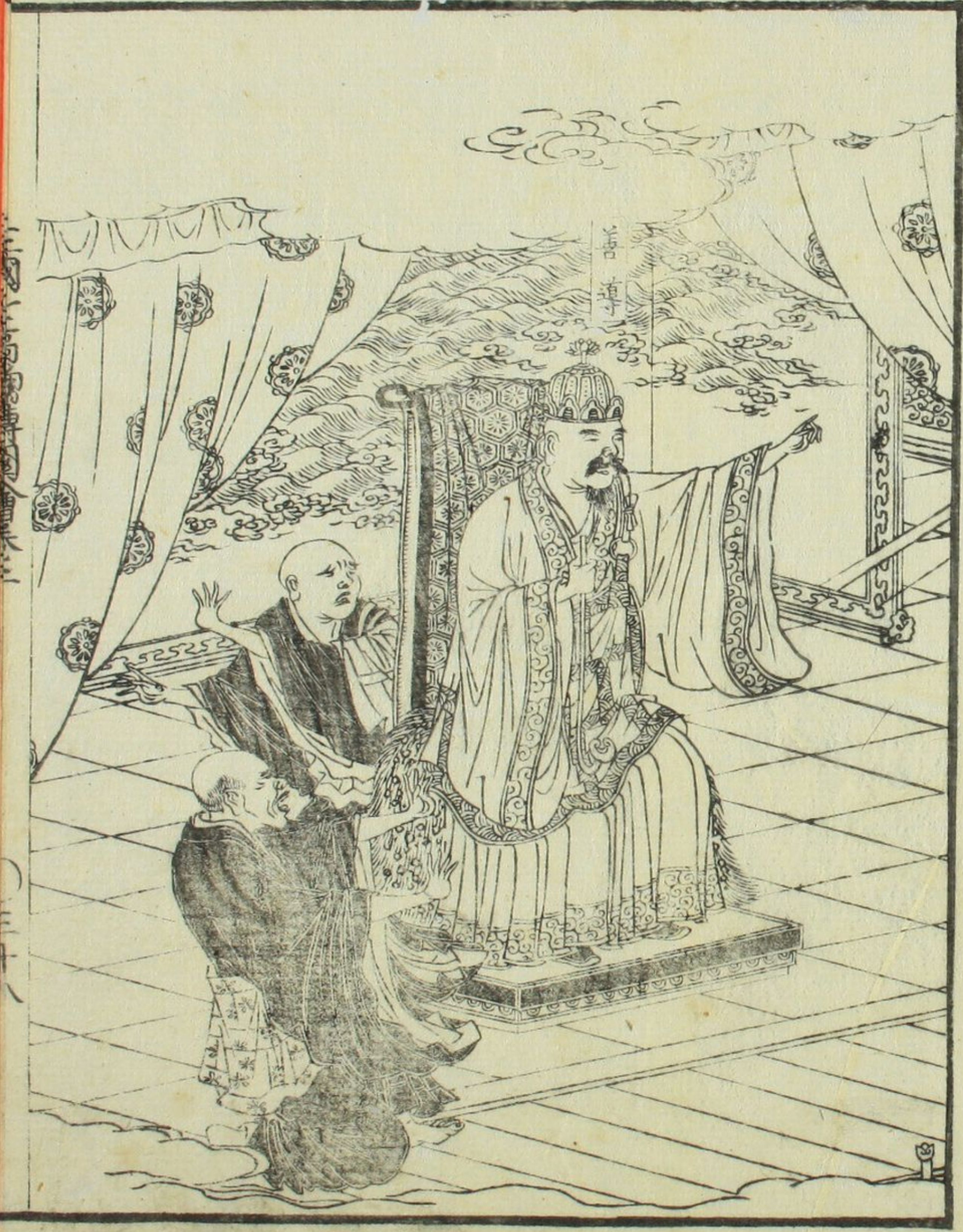
見てある。尤善導の在世ハ京師諸刹の僧尼士女或ハ身ハ高嶺より

投り或ハ深泉小身と沈め或ハ自ら高き枝より墮。或ハ身と林に於て供養

せし者百餘人小及ぶと云。又長安の屠兒牛鹿と屠りて京室藏と云との

あり。善導大師の人と勸めて念佛と云。長安城小満る小らて人々

肉と斷く買つと云。無き程ハ京室藏に於て善導と害せん欲し。乃



持て寺ふりて師と見く西方と指示し久し即浄土の相と現む是と
 見て忽改悔し一念發起して自ら高樹の上を念佛とて十聲その
 樹より墮て終る衆人化佛の天童と引く宝藏の頂門より出ると見ると
 西方略傳小見えたり此のまじく捨身する者有るも末代の下視
 於て慎む事あり自害往生入水往生等へ念佛者のまじりて
 所より源空上人深く戒りて生る念の功とて死む浄
 土小春やると安んずる宣つるあり
 諸傳小善導ハ弥陀の化身なりと云ふ付て古より二説あり一ハ化身
 とし無而歎有の化生あり胎生とて生りて諸傳ハ
 父母の生所とて生るも瑞應傳小姓ハ朱氏泗州の人なりと云新修傳
 ハ臨淄の人なりと云ふ二ハ無而歎有の化生あり胎生あり故ハ父母
 生處ありと云ふ亦れも胎生と云と勝りてして化生の説とて父母生所と

傳小云々ハ諸傳小の例多し又俱舍論小依る小釋迦如来胎生受たすハ
 舍利とて利益せんありん化生ハ骨あり胎生ハ胎内小宿りて生れり
 命ハ骨と收て葬りて此故ハ化生あり父母の胎内小宿りて生れり
 故ハ朱氏の子とて生れり瑞應傳とて惣じて善導大師世に出
 りて云ハ阿弥施如来ハ衆生小代とて願行と圓滿し十方衆生の往生
 と願して正覺の阿弥施佛とて正覺の外ハ往生あり故ハ一心
 弥陀小皈命し一向念佛して本願小修む時ハ心安んず往生ありと
 一切の衆生本願非本願の差別あり正行雜行と分なると自力他力
 の界と弁まぐべ此とて本願の方ハ何の煩も成りて往生
 ありとて自力自力の執心小修むれ雜行雜修自力善本と勵めて空く
 生死小歩むると悲し永劫五劫の幸方も其甲斐ありと思召阿弥施佛
 同体の大慈やむとて得む生處の園小示現し煩惱の林小回入し隨類

應化の形とあり。悪人女人の先達と成て。報土へ往生して。又て凡
 教化せん。あふ出世し。あつる御身。あつる直為。弥陀弘誓。重致使。凡夫
 念即生と釋して。在家も出家も善人も悪人も男子も女人も諸の難行
 難修と振捨て。一向一心。弥陀とたのみ生れ。まゝて念佛。口と勸め
 り。あつるれ。無而忽有の化生して。出世し。あつて。一切衆生。怖退の思ひと
 生ども。あつる。中く教化と受。まゝ。故。不生。死分段の肉身と受。流轉。迷妄
 の凡夫とあり。自力難善と捨て。一向念佛して。佛恩と喜ひ。あつる。あつる
 胎生と。あつる。又長安城の滝。金色の四の偈。あつる。大師化生と
 あり。あつる。浄土安心集の中。あつる。是。大。大。偽。て。笑。と。十。歳。不。残。也。此。と
 あり。あつる。光明大師別傳の注。あつる。見。え。ら。一。日。あつる。言。盡。が。あつる。志。あ。つる。の。あつる。彼。傳。と
 披。闡。し。又。半。金。色。の。尊。形。八。南。無。阿。弥。陀。佛。の。六。字。と。表。せ。り。名。射。不。離
 の。故。六。字。即。彼。佛。射。也。され。八。腰。り。上。の。墨。衣。八。南。无。の。二。字。即。我。等。の。飯

命の色心あり。下の金色へ阿弥陀佛の四字。すから。助けの。佛射あり。法也
 報土得生の行射あり。あつる。凡。心。佛。心。機。法。一。射。の。南。无。阿。弥。陀。佛。と。表。顯
 して。半。金。色。と。化。生。し。の。あつる。あつる。淨土の。射也

三國七高僧傳圖繪會震旦之卷畢

明治十二年
卯一月新調

長岡殿町
柳本角備

